

共生・公正・創造



# ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治



## “テロリストに乗っ取られた”JR東日本の真実”

### 「マングローブ」ダイジェスト版 第12回

あの「週刊現代」連載記事が【マングローブ】という本になった。本紙は筆者（西岡研介氏）の了解を得て、『謎に包まれた非合法集団とJR東日本の抜き差しならぬ関係』をダイジェスト版として紹介することとした。

## パージされた”良識派”

しかし松田氏が、松崎に完全屈服した後も、当時のJR東日本にはまだ”良識派幹部”がいたという。ここで紹介する二人は、JR東日本で松田-松崎路線に異を唱えた幹部だが、二人とも失意のうちに故人となった。その一人が、JR東日本発足当時、「松田氏の片腕」といわれた初代勤労課長の故・野宮一樹氏だ。勤労課とはまさに組合と相対するセクションである。「野宮さんは、松田さんが『鉄労脱退工作』に失敗した後も、松田さんが近いうちに松崎、革マル派排除に動いてくれるものと信じていました。仙台支社の総務部長に就任した90年、側近の部下たちを鄙びた温泉旅館に呼び出し、『山は必ず動く。覚悟はいいな』と檄を飛ばしていたほどです。しかし、91年のあの松田さんの挨拶を聞いて、野宮さんは心底落胆。『これで、この会社ももう終わりだ……』と漏らしていました。そして心労がたたってその4年後、失意のなかで病死されたのです」（野宮氏の元部下）

「あの挨拶」とは、91年9月、当時、副社長だった松田氏が、山形県にある「天童ホテル」で聞かれたJR東労組「ユニオンスクール」で、松崎をはじめとするJR東労組幹部を前にしたスピーチのことだ。松田氏はここで、JR東海やJR西日本の労務政策を批判した。

「我々は『経営協議会』で、会社の基本的な政策をパートナーである皆さんと議論し合意に達したあと、労働条件を団体交渉で決める。山形新幹線であろうと、やるかやらないかということから、投資問題に至るまで、議論させていただいている。(中略)そうであれば、松崎委員長と私だけじゃなくて、皆さん方と会社全員が、経営陣がもっと癒着していいはずであります」（傍点は筆者）「経営協議会」とは、設備投資などさまざまな事業について、経営側と組合幹部が話し合う労使会議のことで、JR東日本労使の癒着の温床（JR関係者）といわれている。

前述の故・野宮氏以外にもう一人、経営側としての筋を通し続けた人物がいる。JR東日本初代人事課長だった故・内田重行氏である。「内田さんは旧国鉄時代、『総裁候補』の一人に数えられたキャリア組のエースでした。このため当然、会議に参加するつもりで来た松崎は結局、会議終了後の懇親会だけの参加になったのです」（JR東日本関係者）

内田氏に完全にメンツを潰された松崎は、その素顔を覗かせる。「松崎はその後、『内田の小僧っ子野郎め！絶対許さん！』と激怒。松崎の逆鱗に触れた内田さんは一年足らずで人事課長から外され、その後は関連会社をたらい回しにされたのです」

（前出・JR東日本関係者）

【マングローブ（講談社）P.158～P.160】